二十三話　からっぽねやみと鬼

むかしなし、からっぽねやみあったけど。稼ぎたくなくて、めえ物、食うたくて、いい物着たくていたけど。

それでお宮さんさいって神さんさ、頼ったけど。

「なんとかくして稼せがねで、甘え物食って、ええどこさやってくだい」

と一生懸命、拝んだど。ふだどもそのうちに眠ってしまったけど。眠ったどこで神様、夢見へだかめだ。じっと山奥さえったものだと。

「白い水、流れるほど、赤ぎゃ水流れるほどあったら、あぎゃ水流れる方さえげえ」

と神さんしえったけど。

それで赤ゃ水、流れる方さえったら、りっぱな御殿みてえな家あったけど。そこさえってみだば、ただおいで、毎日、甘え物食せで遊ばせておいだど。

なん日もえどどこでなれてしまって、ずっと奥の方さえったば「ねっこ、ねっこ、ねっこ」とぬぐくて、うなる音、聞けてきたけど。わずかのきめっこからのぞいだら、鬼どえで人の手足をしめえて、あぶって、油しぼってえだけど。そえだば、ここにえられないと思って逃げだど。逃げだば鬼どにぼられだど。

むこうさ、わずっかの笹小屋っこ見えだど。そこさ隠してもらうべど思って入ったど。したばそこに婆えたけど。

「やあ、鬼どに追らえてきたたえに、おれ、隠してけろ」

としえったど。

「へだら」

としえってこもさぐるぐるんっどくるんで、火棚さちょこっと上げでけだど。したば鬼きて

「婆、えま、人間こねえけな」

「これえ」

としえったば、鬼

「来たべねえ、人間、臭えな、これなんでえ」

としえったば、

「納豆だあ？　まだできねえな。おろしえ」

「まだできねえ」

と婆いったば、鬼

「納豆、食てえを」

と、しえって、鬼、ぼっきりとつっついたど。したば、ぼたっと落ちで足どたらとしてらけど。

そういう夢みたおだど。神さま、そういう夢、見せだべ。

どっとはらえ。